

ヴァルター・ラーテナウ 『時代批判』 (Zur Kritik der Zeit) (一九二二年)

——ゲルマン的イデオロギーと文芸批評空間——

北岡幸代

1 はじめに…『時代批判』概要と分析視座について

第一次世界大戦のおよそ二年半前、一九二二年一月に、ベルリンのS・フィッシャー出版社から、『時代批判 (Zur Kritik der Zeit)』という一冊の本が世に出た。この時期ドイツは周知のとおり、対外的には世界政策という膨張路線に舵をきり、また国内においては文化、経済、産業等あらゆる領域において急激なスピードで近代化の道をひた走っていた。この本の題名が端的に示す「時代批判」とは、まさに現在進行形の近代化にゆれる時代と社会が対象であり、そうしたアクチュアルな評論を試みた著者は、あるうことか当時すでに経済産業界で近代化推進の代名詞のような存在であったヴァルター・ラーテナウであった。ラーテナウは、電気産業の草分け的存在であるジーマンスIIハルスケ社と双壁をなすコンツェルン、総合電気会社AEG (Allgemeine Elektrizitätsgesellschaft)の創業者の息子であり、電力という当時の最先端産業技術の駆使と株式による大資本集約という新しい企業経営に携わる者だった。また、AEGの創業者であるラーテナウの父は、一代でAEGを巨

大コンツェルンに育て上げた人物で、強電技術の発明をして叙爵されたドイツ電気産業界老舗のジーマンス家からその技術を借り受けるかたちで新規参入し、革新的な経営手腕を発揮した人物として当時すでに名をはせていた。だが社会的認知としては、経済的上昇を遂げた新参者としてのドイツ・ユダヤ人企業家であった。その後継者として、経済産業界において、また社会的上昇の側面においても、近代化の目新しさの先端を行くラーテナウが、『時代批判』^②では、自らが牽引の一翼を担うその時代を批判したのである。

そのようなラーテナウの書いた『時代批判』は、彼にとつては単行本としての第一作目であり、実質上の著作家デビューといえるものであった。はたしてこの本は、著者の経歴と批判対象の組み合わせの意外性も手伝って、出版と同時に大きな反響を呼んだ。出版年の一九二二年には、雑誌・新聞紙上に五〇以上の書評が書かれ、その年もつとも話題を呼んだ書籍のひとつとなった。初版三千部から、同年一九二二年六月には四千部増刷、同年内に七版を重ね、その後も『時代批判』に対する一定の関心は継続し、ラーテナウの生前一九二二年までに二〇版、二万部

を売り上げ、一九二五年には二八版となった。^⑤

『時代批判』は、このように書評・評論の場で注目を浴び、多くの書評者たちが、「(本書は)教養人にとって必要不可欠となる、といつてよいだろう」^⑥とか、「教養あるドイツ人は、ラーテナウの繊細な感覚の内容豊かな本書を読んだらいいだろう」^⑦と、読者に呼びかけているように、その主な受容者は、ある一定以上の教育を受けた人々であったと考えられる。ただし、『時代批判』では、外国語や古典語由来の単語や術学的な言葉遣いが随所に出てくるため、書評のなかには、「この上なく熱心で男らしいこの本の享受を何かが損なうとしたら、それは外来語単語の羅列である。だがいつの日かラーテナウは自分の作品をドイツ語に翻訳する暇を見つけるかもしれない」^⑧と、内容そのものは評価しながらも、表現方法への苦言を呈するものも少なくなかった。しかし、哲学者カール・ヤスパースが、「大戦前および大戦中に、われわれの世界の最も多く注意の払われた鏡が成立した。ラーテナウの『現代の批判のため』(一九二二年)とシュベンゲラーの『西洋の没落』(一九一八年)がそれである。ラーテナウはわれわれの生活の機構化の犀利な分析を、「……」資料にも観察にも富んだ自然主義的な歴史哲学を提供する」^⑨と、一九三一年の時点で記しているように、ラーテナウの捉えた「現代」の描写と分析は、同時代の少なくとも言論空間を享受する人々に、少なからず何か訴える力を持つていたといえる。

この『時代批判』のなかで、ラーテナウは、時代のキーワードとして「世界の機械化 (Mechanisierung der Welt)」という言葉を使い、一九世紀半ば以前の世界と、それ以降の「現代」に連なる時代は、決定的な違いが生じていると冒頭で述べ、それに続いて大都市の様相の変化を、感覚に訴えるような比喩的な表現で書き表している。少し長い引用し

てみたい。

「その構造とメカニズムにおいて、白人世界の比較的大きな都市はすべて同じである。大都市は、線路という蜘蛛の巣の真ん中に据えおかれて、石となつて道路の糸を国を越えて射出している。車両交通という可視・不可視の蜘蛛の巣の網は道路の隘路の下を掘り起こして貫通し、人間の身体を毎日二回、末端の手足から都市の心臓部へとポンプのように送り届けている。二番目、三番目、四番目の蜘蛛の巣の網は、湿り (Feuchtigkeit: 水)、熱 (Wärme: エネルギー)、そして力 (Kraft: 電力) を分配し、電気的神経束は、精神の振動を伝える。栄養物や刺激物が、レールの上や水面を滑つて入つてきて、消費されたものは、暗渠を通じて流れ出ていく。そうすると、平均的に観察しても、いたるところで石のように硬いという同じイメージなのだ。たとえば、蜂の巣の蜜房が、しなやかな素材の紙・木材・皮・織布で内装され、列をなして並んでいるが、外側は、鉄・石・ガラス・そしてセメントで支えられている。通りの壁は、少し高かったり少し低かったり、窓や扉の開口部をぎつしりつめたり、幅広くゆったりつめたり、水平や垂直の掘りこみと渦巻き模様で区切られて、どの国でも同じ表情をしている。「……」少なからぬ単調さが、精神的なものなかに出てくる。昼夜の仕事において、都市は世界とタイアップして事に当たる。つまり、都市の気分、流行、熱狂、愛着を、そして娯楽、歓喜、芸術を、または学術や仕事を、諸都市は取り交わし、交換によって好きなものを見つめるのだ。同じ戯曲がベルリンとパリで上演され、同じ商品展示がロンドンとニュー

ヨーロッパで人目につく。諸都市は、同じ科学問題で息つく暇もなく、同じスキャンダルを笑い、同じ料理で腹をふくらませ、同じ家具に取り囲まれている」⁽¹⁰⁾。

この引用箇所では、ようするにドイツで一九世紀半ばから急速に発達した鉄道・蒸気船・道路交通網や、重工業技術の開発により、大都市での人の移動や物流の活発になった様相を表現している。しかし、それと同時に、大都市は、工業化による大量製品の流入や、都市間の往來の量とスピードが増すにつれて、各都市独自の特徴が失われ、相互に同質化、単調化していく、そうした物質的利便性の増大とともに、失われゆく精神的な豊かさも、ラーテナウの時代認識は、捉えている。こうした、近代化に伴う文化ペシミズム的な危機感は、『時代批判』への五〇件近くの書評を読む限り、同時代のラーテナウの著作を読む階層の人々にとっては、すでに体感されていたものと思われる⁽¹¹⁾。書評者の中には、ラーテナウの記述に触発されて、自らが感知する近代化の負の部分⁽¹²⁾を記述するものも多い。たとえば、ウィーンのジャーナリスト、エーミール・レーブルは、「心のなかに深く巢食っているのは、不快な感情である。おとぎ話のような物質的な進歩は、社会をいい按配には作り上げなかつたのだと今日の社会は感じている。つまり、前代未聞の豊かさの増大に見合った、内面生活の向上が達成されていないのだ⁽¹³⁾」と、『時代批判』にに応じている。そして、ラーテナウ研究者のディーター・ハイムベッケルが指摘するように、「世界の機械化」の影響下にある時代の描写にラーテナウが文学的あるいは詩的な表現を与えて提示したことに、多くの書評者が「教養ある表現 (der bildhafte Ausdruck)」と賛辞をおく⁽¹⁴⁾り、改めて時代変化の再確認を行い、危機意識の共有という共感を呼び

起こして、更なる反響へとつながった⁽¹⁵⁾。実は、「機械化」という産業技術時代を象徴するキーワードは、『時代批判』以前にも、ゲオルク・ジンメル⁽¹⁶⁾の『貨幣の哲学』(一九〇〇年)や、クルト・ブライジヒの新聞紙上の論考「我々の時代における魂の機械化」(一九一一年)などで、時代を言い表す言葉として使用されていたのだが、世間一般に、同時代を「世界の機械化」、「機械化の時代」と表現する言い回しが定着したのは、まさにラーテナウの『時代批判』が契機となったのであつた⁽¹⁷⁾。

こうして、「機械化」というキャッチフレーズとともに、ラーテナウの『時代批判』は話題を呼んだが、しかし、『時代批判』には、時代を象徴するキーワードがもうひとつ提示されている。「脱ゲルマン化 (Entgermanisierung)」がそれである。次節で具体的に紹介するが、これは端的に言えば、一九一二年の何点かの書評でも指摘されているように、「ゴビノー、チェンバレン、ヴォルトマンの路線を行く」⁽¹⁸⁾通俗的なゲルマン礼賛に基づく人種主義的・階級主義的価値観に依拠するものであり、「世界の機械化」が進むにつれて、ゲルマン的な価値が衰退していくことに危機感を抱く、ゴビノー以来の人種・階級の混合による人種劣化説である。そして、機械化の時代におけるラーテナウの理想的価値観の提示のなかで、ゲルマン的価値観の回復が称揚されていく。

ラーテナウの『時代批判』は、同時代的には一定の読者を確保し、出版市場においても成功を取めたが、時代を経てなお読み継がれる書物とはなりえず、後世からラーテナウが著作作家として注視されるに至っていないのは、彼がこのゲルマン的人種主義・階級主義を奇異なほど安易に受け入れ、論旨の中核に持ってきている点が、その要因の一つと推察される。

ラーテナウ研究の流れのなかにおいても、このラーテナウの人種主

義・階級主義的な叙述内容に関しては、長らくほとんど不問に付されてきた。研究対象としての価値判断の俎上にものらなかったといつてよい。それよりもむしろ、ラーテナウの政治・経済面での社会機能的な役割を各専門分野で位置づける分析研究や、ドイツ・ユダヤ人としてのラーテナウの同化をめぐる問題、あるいはラーテナウの暗殺事件に焦点を当て、そこから歴史上の位置づけと社会分析をほどこす、ラーテナウ自身の特異性や彼独自の社会貢献に注目する研究が長らく主流であった。¹⁶⁾ またヴェーラーやニッパードによるヴィルヘルム期ドイツの通史的歴史叙述の中でも、ラーテナウが公人として第一次世界大戦下の陸軍で原料調達に成果を挙げたことや、反ユダヤ主義との関係における彼の社会的位相や社会提言など、ラーテナウの果たした建設的な社会的役割が取り上げられ、彼の主要な著作内容に関してはまったく言及がない。¹⁷⁾

しかし、一九九六年に、ゲルマニストのデイーター・ハイムベッケルが、初めて、著作家としてのラーテナウに着目し、彼の著作物のすべてを網羅する形で書誌研究としてまとめたことは、ラーテナウ研究に新しい方向性を示すことになった。¹⁸⁾ ハイムベッケルは、ラーテナウの初期のディレクタントのみなされてきた雑誌記事等もすべてとりあげ、それぞれの著述時期のラーテナウの交友関係や社会的立場にまで目配りをしたコメントをそれぞれに付している。それは、ラーテナウ作品の詳細なコメントとしての役割を果たしつつ、すでに忘れ去られた作品からでさえも、社会との相互連関性を視野に入れて、ラーテナウの生きた時代をあぶりだすことが意図されている。さらに、二〇〇九年一月に上梓された、ハイムベッケルの編集による論文集の序文では、ラーテナウ研究の新しい視座として、「彼の時代の文化的政治的ネットワークとその時代の思考体系」と彼の文化的創作との連関性と、作品のディレ

クタント性ゆえに等閑視されてきた、「二〇世紀初頭のまさに知的言説」へのラーテナウの影響が挙げられた。¹⁹⁾ また同じく二〇〇九年に出版されたロタル・ガルによる『ヴァルター・ラーテナウ ある時代の肖像』では、「単なる個人的な伝記を超えて、その時代に視点が当てられる」ことが意図されている。²⁰⁾

ラーテナウが身をおいた文化的政治的ネットワークのもとで、彼がどのような思潮を同時代人たちと共有し、そこからさらに、どのような形で社会の思考体系に影響を及ぼしたのかは、ラーテナウの生きたヴィルヘルム期という近代化に揺さぶられている社会の、文化思想のダイナミズムを分析する一角として非常に興味深い。ただし、ハイムベッケルがいう「知的言説へのラーテナウの影響力」の「真意」とは、ラーテナウが同時代へ有効に貢献する何らかの意義を探索することに重点が置かれているようであるが、ラーテナウを文化的政治的ネットワークに位置づけるとき、果たして社会にポジティブに貢献するとみなされる影響力のみが時代分析にとって有効なのであるか？²¹⁾ 新しい分析視座を提供したハイムベッケルでさえ、ラーテナウのもつ不可解な、後世からは評価の対象ともならないゲルマン的イデオロギーへの憧憬については、直視できないでいる。しかしながら、ラーテナウの持つ負の思想ともいえるこのゲルマン的イデオロギーをめぐって、彼の立場での社会的影響力を探究することは、おそらく、ドイツ特有の問題系におさまらず、より広い普遍的な視野へとつながるのではないかと考えられる。

たとえば、イスラエルの歴史研究者シュロモ・サンドは、イスラエル国家をユダヤ人国家として正当化するユダヤ人のネイション意識の形成過程の再検討を試み、著作『ユダヤ人の起源』のなかで、ネイション意識の形成過程と中産階級出身の新しいインテリゲンツィアの関係性

について、さまざまな論点を提示している。サンドは、「政治的・市民的なネイション意識の形成過程と、種族的に有機体的起源にあくまでこだわるネイション意識の形成過程——この両者のあいだの差異の歴史的起源を分析する課題はまだほとんど着手されずに残っている」と指摘したうえで、さらに、以下のような問題提起をしている。

「ネイション観念は、決して博学な人々の研究室で芽を出し、次いでイデオロギーに飢えた大衆によって採用され、ついにはひとつの生活様式になった、そういう理論的な産物ではない。ネイション思想の発展過程を理解するためには、なによりもまず知識人がこの現象に介入したときのそのあり方を分析せねばならず、その際、これら知識人の社会政治的な地位——これ自体、伝統的社會においてと、近代社會においてとで異なるが——についても思いをめぐらせてみなければなるまい」。

ラーテナウのゲルマン的イデオロギーに注目することは、サンドの言う、種族的に有機体的起源にこだわるネイション意識の形成に関与した、新興中産階級出身のインテリゲンツィアが、いかに言論空間や社會思潮へと介入したのか、その分析と再検討に重なることになるだろう。

本論では、既述した問題意識の骨格をてがかりに、ラーテナウの『時代批判』を、そうした種族的に有機体的起源への憧憬を携えて新規に言論界に参入し、社會思潮に何らかの介入あるいは影響を及ぼした契機としてとらえ、この『時代批判』に対して批評を担う者たちがいかなる反応をしたのか、その関連性を跡付けてみたい。

2 『時代批判』…政治社会的エッセイとゲルマン的イデオロギー

すでに述べたように、ラーテナウの本格的な著作家としての出発は、S・フィッツシャー出版社からこの『時代批判』を上梓してからだ。実は彼はエッセイの書き手として、一八九七年から、マキシミリアン・ハルデンが一人で編集主幹をつとめる文芸政治週刊誌『未来(Die Zukunft)』に定期的に投稿を続け、一九二二年までに三二のエッセイを『未来』に掲載している。雑誌『未来』は、貴族精神主義的なハルデンの強烈な個性の影響下にあつた文芸政治雑誌であつたが、ラーテナウは一八九七年以来、ハルデンと長らく親しい交友関係を続けていた。『時代批判』前史としてのラーテナウのイデオロギー・思想形成の側面からもハルデンとラーテナウの交流は、極めて興味深い過程であるが、紙面の都合上、別途稿を改めたい。本稿では、『時代批判』出版前後に焦点を絞り、まずは、S・フィッツシャー出版社との出版までのかかわりを見ていく。

(1) ラーテナウ、S・フィッツシャー出版社から登場する

『時代批判』が、一九二二年一月にS・フィッツシャー出版社から刊行され、その直後から反響を呼んで版を重ねたことはすでに述べた。これは、文芸出版社であるS・フィッツシャー出版社の政治・経済という新たな分野への進出にさいし、社主のザムエル・フィッツシャーがラーテナウを起用した読みがあつた結果でもあつた。

S・フィッツシャー出版社は、一八八六年九月一日にザムエル・フィッツシャーによってベルリンに設立され、一七世紀から操業を続けている老舗出版社のコッタ出版社などと比べ、当時の世紀転換期においてはま

だ、新興出版社という社会的認知であった。しかし周知のとおりS・フイツシャー出版社は、創業以来、自然主義文学、モデルネ文学の新人作家の発掘と育成につとめ、二〇世紀にはいると、ゲルハルト・ハウプトマン、ヘルマン・バル、リヒャルト・デーメル、アルトゥーア・シュニツラー、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールなど、いわゆる著術家(Schriftsteller)ではなく、モデルネ文学の旗手として人気を博す作家詩人(Dichter)を抱え、当時の文芸作家希望の若者たちにとつては、S・フイツシャー出版社から本を出すことが夢である、といわれるほど文芸出版社としての名が高まつていた。⁽²⁵⁾ そうした時期の一九一一年秋、創業二五周年という節目の年を迎えたことをきっかけに、ザムエル・フイツシャーは、「新しい使命、新しい影響領域、変化する社会と出版社との密接な相互連関⁽²⁶⁾」を模索し始め、出版社の国民教育的な機能、民主主義文学の構築という使命を意識して、学術本ではなく、文芸誌のなかで読まれるような政治社会的エッセイの出版を決意した。そのうえで、フイツシャーが重視したのは、この政治社会的エッセイを芸術的に仕上げる、ということであった。⁽²⁷⁾ この要求にラーテナウは見事に合致していたといえる。⁽²⁸⁾ というのもフイツシャーが、出版社の政治的な役割を意識するようになったのは、少なからずラーテナウの影響があったからだ。フイツシャーとラーテナウは、ベルリンの西に位置する高級住宅地グルーネヴァルトに居を構えて親しい交流を重ねていたが、フイツシャーはラーテナウとの話らいのなかで、ラーテナウから政治談議をよく聞かされていた。⁽²⁹⁾ 少なくとも『時代批判』出版の数年前から、ラーテナウは、フイツシャー宅のサロンのな集まりや、「フイツシャー一家」と称されるフイツシャー出版社お抱えの作家たちとの「木曜会(Donnerstagsgesellschaft)」に頻繁に参加するようになっていた。そこで

のラーテナウは、編集者やフイツシャー、そして作家たちと、しょっちゅう「政治世界観の議論」を行い、そのようなときはきままつて、レトリックの技巧をふんだんに凝らしながら、その場を制圧するかのようとうとうと話をしていた、という様子を、フイツシャーの伝記作家メンデルズゾーンが伝えている。⁽³⁰⁾

フイツシャーが、「政治社会的エッセイ」に「芸術的な仕上げ」を要求したのは、従来新聞のフュトン欄に演劇評や書評記事を書いていた文芸批評家たちが、一八九〇年代から、芸術の枠にとどまらずに社会批判も行うようになり、政治ジャーナリズムに進出する流れが顕著となっていたことも念頭において、⁽³¹⁾ 文芸批評家たちの表現を意識してのことだったかもしれない。ここでは、このようにラーテナウが、政治社会的エッセイを芸術的表現で書く、というフイツシャーの要求に合致したうえで、単行本作家として登場したことを確認しておきたい。ラーテナウの著作家としての経歴にとつても、文芸出版社であるフイツシャー社の作家の一員となったことは、決定的な転機であったことはいうまでもない。

(2) 『時代批判』における「機械化と脱ゲルマン化の時代の人間」

本節では、フイツシャーから政治社会的エッセイを、芸術的に仕上げたことを期待されたラーテナウが、自らのゲルマン的イデオロギーに満ちた人種・階級論を『時代批判』のなかでどのように提示し、叙述しているのかを紹介したい。

『時代批判』において、ラーテナウが時代表象のキーワードとして、「世界の機械化」と「脱ゲルマン化」という言葉を使っていることはすでに触れた。『時代批判』では、一八五〇年代以降の近代としての「我々の時代」の、製造・組織・社会・生活の変化を「機械化」という

言葉を軸に説明していく一方で、その「世界の機械化」により、人間がいかなる影響を受け、何を失い、どのような人間が求められ、どのような方向へと向かって行くのかが、「脱ゲルマン化」の過程として語られる。その失われたもの、あるいは理想とすべきものの価値を選択する基準が、ゲルマン主義の価値観に依拠しているといえる。そこでまず先に、前者の「世界の機械化」のラーテナウによる概念設定をあらかじめ紹介しておきたい。

ラーテナウの『時代批判』のなかで、同時代の国民経済学者や社会学者から最も評価されている点²³が、この「世界の機械化」の根本原因を「国民増大 (Volkvermehrung)」、つまり人口増加によって説明している点である。

「今や、数十倍、数百倍にふえている白人の人口のために、食物と消費財を生産することが課題である。……労働と物資の制約と下の生産の増大が、世界の機械化の根底にある公式である。」

(四一)。

ラーテナウは、近代以降の経済発展、技術発展の要請要因として、急激な人口増大を指摘したが、この増大する人口を養うための生産力向上に必要な「世界の機械化」を支えるためには、それに適応する人間のタイプがある、と彼は説く。それゆえに、「機械化」以前の時代と「機械化」の時代では、社会を牽引する人間の種類が異ならざるを得ないと論じている。「機械化」とともに、豊かな精神性を失いつつある人間に、「何が起きているのか? 何が、人間、人間の身体、人間の魂を、どのように変化させたのか? 精神によって世界を完全に作り変え、また

逆にその作り変えられた世界から精神と魂へと影響を及ぼさせるために、何が人間の精神を捉えたのか?」(二二四) という人間探求の問いがラーテナウの問題意識の根底にあり、同時に「近代世界の根源軸としての根本的な現象」(二二四) とその働きを認識し、「我々の本質と我々の近代との関係を客観的に感じ」(二二五) て、「最終的には発展の方向性のイメージを得る」(二二五) ことで、時代の変化との関連性を視野に入れたその探求の試みは、社会に向かつて開かれたものであることが意識されている。しかしながら彼の場合は、その探求の前提から人種論・階級論とともに進められていく。「機械化」の進行する過程で性質が変化しているようにみえる人間は、じつは、社会を主導する階層の入れ替えが起きているのだとする。つまり「世界の機械化」以前には、豊かな精神を保つ社会が存在しており、それは確固とした二層階級社会の上層階級によって支えられていたからだ、として次のように述べている。

「歴史というものは、支配する上層階級と、出自が様々である下層階級の支えからなる共同体制にのみ与えられてきた。そうした二層性は、貴族体制のなかにはつきり刻印されている。この世のあらゆる文化の出所が貴族の創造物であったことは、インドにギリシャにローマ、フィレンツェにヴェニス、イギリスにオランダ、フランスにドイツが証明している。はるか彼方の東方でさえ、指導権と責任は、日本人のものとなるに違いない。なぜなら、彼らの封建制度はいにしへの二層性の残滓をその生活のなかに保持しているからである。……」人間の対立と義務という最も美しい力は突如としてあふれ出す。上に立つ者が支配し、率い、責任を持ち、護る。下の者は服従し、従事し、仕え、励む。上の

者は、志操と自由のために自らを育て、下の者は、ねばり強さと熟練のために自らを育てる。このような分業が偉大なものを生むことになるのだということを、ごく最近に至るまで、自覚を持った組織の全てが示している（二九—三〇）」。

この上層階級の支配者精神こそが、ラーテナウにとっては、以下のような理想としてのゲルマン精神だった。

「民族は、ずっと長きに渡って、ゲルマンの精神的導きを必要としてきたし、今日なお、ゲルマン的特質を必要としている。こうした制約のおかげで、西ヨーロッパ、とくにドイツの精神生活は、その超越した内実を獲得したのであり、そのおかげで芸術と精神科学は、自由と内面性を得て、研究はその献身的行為と真実を求める心を、職業生活は心の寛大さを、公的生活は品行方正さ、献身、勇気、忠誠心を、ゲルマン的特質に負っている（七二）」。

「人間性においては、勇気と寛大さという古いゲルマンの理想概念が支配している。勇気の力に満ちた男は、感嘆されて愛される。彼が寛大で公平で慈悲深い支配者だと自ら示している限り、卓越した強大な力によって貫徹することすべてが彼には許されている（七七）」。

さらに身体の理想についても、ゲルマンの身体が理想だとして描かれている。

「身体の理想は、ギリシャの理想に類似しているが、それよりもっとほっそりと、それほど丸みを帯びず、さらに引き締まって、筋肉がついている。頭はギリシャの理想より大きいが、身体との比率ではそれでもなお小さく、首はさらに細くもつと長い。鼻は、ギリシャ型よりも強くまがって明らかに幅が狭いが、ギリシヤ型と同様に高い。唇は、ギリシヤ型ほどふっくらとしておらず、頬はそれほど低くなく、額はより平らである。特に女は、ギリシヤほど胸幅は広くなく女傑風でもなく、もつとやさしく、もつと乙女らしい。全体としてみると身体は、より繊細でより個性が強く、体操訓練よりも曲馬術訓練に合っている。この金髪碧眼の理想型が、生き延びているゲルマンの特質から借用されていることは疑いようもない。理想型は、またその摩耗消滅が終わっていないところでは、いたるところで出現している（七六）」。

ラーテナウによると、こうしたゲルマンの精神と理想型としてのゲルマンの身体をもつかつての上層階級の者たちの没落とは対照的に、機械化の時代に、その駆動力として台頭してくるのが、かつての下層階級の抑圧されていたものたちである。かれらについての描写もあげておこう。

「機械化を駆り立てるためには、もつと価値の低いタイプの人間が必要である。要するに抑圧された者たちと解放された者たちが必要なのである。彼らは奴隷的状态から労働癖をもたらさねばならなかった。そして忍耐というステイグマは、学習を通じて知的収集物を蓄えねばならない者にとって、必要不可欠である。手先の器用さを彼らは根源から所有していた。というのも、

より弱き者たちは、昔から仕事の技術に頼らざるを得なかったからである。彼らが思案しアイデア豊かになったのは、恐れと感情から熟慮することによって、自分たちの強みを蓄えたからである(七一)。

ラーテナウが依拠している、既述のゲルマン精神、ゲルマン的身体像の表象は、同時代の読者にとつても、馴染みのない表現ではなかった。人種間の混合による人種劣化論の祖ゴビノーのフランス語原本『人種の不平等』が、ドイツ語に翻訳されたのが一九〇〇年³³、その前年一八九九年には、ゴビノーの理論的後継者とも言われるヒューストン・スチュワート・チェンバレンが『十九世紀の基礎』を出版しており、ラーテナウの人種論は、ゴビノー、チェンバレンの路線を踏襲したものだとの指摘は、書評のなかにも見受けられる。

ただ、ラーテナウは、このゲルマン的イデオロギーに依拠した人種論・階級論を、『時代批判』のなかで初めて叙述したのではない。ハルデンの雑誌『未来』にエッセイ的論考を投稿していた時分から、彼は人種論・階級論を展開していた。例えば、「弱さ、恐れ、目的について」(一九〇四年)においては、上層階級に美德としての勇氣と強さという特質をあて、下層階級には「恐れ人間(Furchmenschen)・「目的人間(Zweckmensch)」というラーテナウの考えたネガティブ像としての人間分類を対応させて、『時代批判』で提示されている二層階級論の雛形がすでに提示されていた。『時代批判』では、そこにゲルマン的イデオロギーを明確に付与して、より広範な読者に向けて提示しなおしたことになる。

3 批評空間の賛辞と沈黙

文化社会ネットワークのなかに、著作家としてのラーテナウを位置づけ、社会思潮との相互連関性を探る過程として、本稿では『時代批判』をめぐる大枠の概要と方向性しか提示しえていないが、ラーテナウのこの通俗的なゲルマン的イデオロギーに彩られた人種論・階級論の内容に、『時代批判』の多くの書評者たちは、どのように応じていたのだろうか。最後に、結びに変えて、この書評空間の言論者たちの反応について述べてみたい。

ラーテナウの主要三作品をおさめた、資料批判版全集第二巻のなかで、エルンスト・シューリンは、『時代批判』について、書評の引用をかなり多めにとりながら解説を施し、ラーテナウの人種主義的イデオロギーに対する、当時の人々の反応については、「同時代の人々は、ラーテナウの人種理論にまったく納得しなかった」と、まとめている。確かに、シューリンが引用しているように、フランツ・オッペンハイマーやアルフレート・ケアは、ラーテナウの人種理論を書評のなかで明確に否定し、オスカー・クラインは、「ラーテナウの本は、「……」反チェンバレン的」な意味で、大きな矛盾にぶつかるだろう」と警告をし、シュテファン・ツヴァイクは、遠まわしに異議をほのめかしている。しかしこの四人を除いて、他の圧倒的多数の書評者たちは、ラーテナウの人種論については取り上げず、ほぼ素通りであるといつてよい。

その一方で、これら新聞雑誌上の無記名も含めた多くの『時代批判』書評では、多くの賛辞がラーテナウに向けられ、その賛辞はいくつかの傾向に分けられる。ひとつは、学術界の者でも著述を職業とする者でもない、企業家として実務の人であるラーテナウが、時代分析に関する単

行本を上梓したことに對する驚きと、その意義を認めていること。二つ目には、ラーテナウの文体と言葉使用に對して、詩人のように美しい教養あるドイツ語を使っている、と称えるもの。もうひとつは、ラーテナウの時代批判は男らしい、というものである。

当時のドイツでは、ラーテナウのように企業家として産業界で働く者が、書物を書く、ということとは、非常にまれで大きな驚きを伴うものであったようだ。ルートヴィヒ・シュタインがイギリスの状況と比較して、「イギリスでは、ヴァルター・ラーテナウのように『世界の機械化』の仕事と経営の真つただ中に、すなわち、ねじとしてではなくてこととして立つ者が、このようにして出現することは、ドイツにおけるほど驚くことではない」とわざわざ説明を加えていることから、ドイツではまだ「実務家」と「作家」が同一人物であることが珍しかったことが伺える。しかし、評者たちの間では、ラーテナウと同様に彼ら自身も持つ時代への危機感のなかで、「実務家」の時代批評に新たな意義が認められている。先のシュタインは続けてこういう。

「ラーテナウが特徴づけているような、機械化され、あるいは脱ゲルマン化された我々の世界にあつては、現実生活をじかに感じている男たちが、自らの理論を打ち立てるといふ内的な使命を持つときに初めて、より良くなりうるのだ。我々が必要とするのは、開かれた視線で地上の領域を歩きとおし、哲学的に鍛えられた技術者という専門家の目で、文化機構全体の歯車装置を吟味した、世事をわきまえた男たちなのである」。

シュタインのこの引用部分は、『時代批判』に對する書評の雰囲気の特

徴をよくあらわしているといえる。技術という実践に通じ、なおかつ「哲学的に鍛えられた」ということが大事なのである。この場合「哲学的に鍛えられた」というのは「教養のある」という言葉との置き換えが可能で、その「教養」のあるなしの判断には、その文体が大きな役割を担っていた。おそらく、ラーテナウの文体が簡潔明瞭で、装飾をそぎ落とした文体であったならば、『時代批判』の評価も異なっていたことだろう。ラーテナウの文体への賛辞によれば、彼の表現は「教養ある」、「詩人の」表現だからこそ、尊敬に値する。確かに、ラーテナウは、詩的なたとえやレトリックの技巧を好み、『時代批判』も、「過剰な外来語」に難がつけられるほど、言葉は装飾をまとい、なおかつ、「教養語」によつて、洗練された雰囲気醸し出していた。ゲルマン的イデオロギーに満ちた人種・階級論も、こうした文体で語られていたのである。そこを、ラーテナウの人種論を明確に否定しているオッペンハイマーが、多くの書評の中で唯一、指摘している。

「私が異議を唱えるのは、歴史哲学的な基本的解釈である。人種理論の無数のヴァリエーションの一つが扱われており、これが私の考えでは、そのどれもこれもが、目標に達し得ないほど、まったく耐えることのできない根拠にあるのだ。その際、私が見逃したくないのは、このラーテナウのヴァリエーションが、繊細さと円熟によつて、なおかつ粗雑な国粹主義的書き物からの切り離しによつて、それら同類の者たちから、非常に心地よく際立って見えるのを、賞賛しながら褒めそやすことである」。

書くことを職業としている多くの書評者たちは、洗練された言葉遣

い、詩的表現の美しさ、磨かれた教養語的確な駆使能力等、言葉による表現には、心血を注いでいる人々であろう。そのような言説に携わるものたちが、言葉の表現技巧の繊細さや熟達にとらわれるあまり、逆に言葉の表面的な装いしかみることができず、その言葉の内実を見過ごす陥穽を、オッペンハイマーは指摘している。確かに、彼らの多くは、ラーテナウの人種論には触れることなく、また賛同も示していない。しかしその沈黙の空白には、ラーテナウの人種論を黙ってやり過ごせる程度の親和性がたちこめていた。そして、彼らの書評には、『時代批判』を「男らしい」という表現で讃える箇所が見える。この場合、「男らしい」という賞賛の自身が、ラーテナウがゲルマン的支配者層に与えた表現のように、勇氣と強さを持ち、「卓越した強大な力」をもつ支配者としての男たちへの憧憬であるのだとすれば、ラーテナウのゲルマン的人種イデオロギーとの親和性はさらに増す。沈黙も容認的な色合いが濃くなるだろう。そして、あまたの書評の中で、アルフレート・ケアがただ一人だけ、被支配者の側の立場に言及することで、ラーテナウのゲルマン的支配者像に異議申し立てをしている。ゲルマンの父祖がその昔、捕らえた被征服民に宗教的儀式で残酷な殺戮を行ったことに触れ、そのような支配者層が、今の時代の「恐れ」からの解放として特筆すべきものなのか、と問いかけている。ケアのこの指摘は、ラーテナウにも、『時代批判』を「男らしい」と讃える書評者たちにも、賞賛される強き支配者層のその傍らで理不尽に犠牲となるものたちへのまなざしが、決定的に欠けていることを突いているといえる。

『時代批判』を出版したザムエル・フィッシャーが、彼自身、ラーテナウのゲルマン的イデオロギーに満ちた人種論の内容をどのように考えていたのかは記録に残っておらず、うかがい知ることができない。確か

に、フィッシャーが、政治社会的エッセイの分野に新規参入する際に、芸術的な表現を要求したことは、本を売ること、本の受容に対する彼の鋭い嗅覚を感じずにいられない。『時代批判』の場合、フィッシャーの読みは当たったのだ。しかし、政治社会的エッセイへの領域拡大を狙って当初意識されていた、出版社の国民教育的な機能、民主主義文化の構築という目的に対しては、フィッシャーはその後どう捉えていたのだろうか。少なくともフィッシャーがその傾向を察知していた、『時代批判』の受容層は、イデオロギーの意味する内実を評価する力と抵抗力に脆弱さをはらんでいたといえる。S・フィッシャー出版社から、政治社会的エッセイの単行本作家として新たに言論界に登場したラーテナウの成功は、そんな彼らに支えられ、またラーテナウのゲルマン的イデオロギーは、教養ある詩的表現と評される文体をまとうことで、一九世紀から台頭してきたゲルマン的イデオロギーの先導者たちとは一線を画すかたちで、名声すら獲得して、まずは文芸批評空間に流布していったのだ。

注

(1) 電機工業において、一九世紀後半以降、ヨーロッパではドイツが独占的地位を確立していたが、その草分け的存在であるジーメンス＝ハルスケ社 (Firma Siemens & Halske) は、ヴェルナー・ジーメンス (Werner Siemens, 一八一六—一八九二) によって一八四七年に設立された。強電技術の画期的発明である大容量電力供給を可能にする発動機の原理は、一八六六年にこの創業者によって発明されている。ヴェルナー・ジーメンスは、一八八八年に叙爵され、ジーメンス家はフォンを名乗るようになった。大野英二『ドイツ金資本成立史論』有斐閣、一九五六年、八六頁。

(2) ヴァルター・ラーテナウ (Walther Rathenau, 一八六七—一九二二)の父親エーミール・ラーテナウ (Emil Rathenau, 一八三八—一九一五)は、トーマス・アルヴァ・エディソンの発明した電気白熱光のドイツ国内での特許権を獲得し、一八八三年にAEGの前身であるドイツ・エディソン応用電気会社を設立。先行企業であるジーマンス・ハルスケ社から技術面・金融面の援助を得ながら、一八八七年に社名をAEGに変更した後、この企業は急速な発展を遂げる。AEGの特徴は、当時のジーマンスのようにまだ家族主義的経営志向の強い企業が多かつたなかで、事業拡大の大量資金調達のため、株式会社形態の外部資金調達にいち早く着手し、その資金で大規模生産活動を可能とし、なおかつ電気会社の発起業務によって多数の傘下企業を保有する、その革新的な経営手腕であった。一八八八年にベルリンのウンター・デーン・リンデンの街灯照明の電化を一手に請け負ったのはAEGであり、一八九六年に、資本総額と傘下企業数でジーマンス・ハルスケ社を追い抜き、一九〇〇年には従業員数一万七千人を擁して生産部門から金融部門までを併せ持つ巨大コンツェルンに急成長した。ヴァルター・ラーテナウは、一九〇二年七月から、AEGの主力銀行であるベルリン商業銀行の役員として、金融業務とAEGの傘下となる電気会社の設立や吸収合併に携わり、一九〇四年にはAEGの監査役会役員として、傘下会社の管理にあたっていた。彼の金融面と企業の統合再編成にかかわった経済活動は、結果として電気産業界を、ジーマンス・ハルスケ社とAEGの二大コンツェルンによる強力な集中化体制を整えた産業部門へ再編することに寄与したとされる。Manfred Pohl, *Emil Rathenau und die AEG*, Berlin/Frankfurt am Main 1988, S. 23-25, S. 34-35. 大野英二「前掲書」八六一—〇二頁。Usla Madar, *Walther*

Rathenau als Funktionär des Finanzkapitals. Beiträge zu einer politischen Biographie(1887-1917), Dissertation (Humboldt Universität), 1974, S. 96.

(3) Dieter Heimböckel, *Walther Rathenau und die Literatur seiner Zeit. Studien zu Werk und Wirkung*, Würzburg 1996, S. 182. ラーテナウの死後一九二九年に「エルンスト・ゴットフリープが、『ヴァルター・ラーテナウ文献目録』を編纂しており、そのなかの「ヴァルター・ラーテナウ博士に関する出版物の文献目録」によれば、『時代批判』の書評は、同一書評の他紙転載も含めて、一九二二年に七八件、一九二三年に六件が数えられる。Ernst Gottlieb, *Walther Rathenau Bibliographie*, Berlin 1929, S. 121-127.

(4) Ernst Schulz, “Zu Rathenaus Hauptwerken”, in: *Walther Rathenau-Gesamtausgabe Hauptwerke und Gespräche*, Bd. II, München/Heidelberg 1977, S. 508.

(5) Ludwig Stein, “Philosophische und geisteswissenschaftliche Rundschau”, in: *Nord und Süd*, 36. Jahrg. Band 140. Heft 446 Zweites Jahranheft, 1912, S. 239.

(6) Franz Oppenheimer, “Zur Kritik der Zeit”, in: *Berliner Tageblatt*, No. 50, Sonntag, den 28. Januar 1912.

(7) 『時代批判』は、一九一八年に、S・フィッシャー社から出されたラーテナウの五巻本の全集に再収録されているが、この全集版では、単行本のなかに見受けられる多くの外来語単語がドイツ語由来の単語に置き換えられている。ただし、私が保有している一九二二年発行の「一八一〇版の単行本は、一九二二年版のままで、改定は施されていない。現在刊行中の、完結全六巻が予定されている。資料批判の施されたラーテナウ全集に収録の『時代批判』は、一九一八年の全

集版に依拠してゐる。 Cf. Walther Rathenau, Ernst Schulin (Hg.), *Walther Rathenau-Gesamtausgabe Hauptwerke und Gespräche*, Bd. II, München/Heidelberg 1977.

- (8) Emil Löbl, "Feuilleton, Kritik der Zeit", in: *Wiener Abendpost*, 25. 7. 1912, S. 2.
- (9) カール・ヤスパース (飯島宗享訳) 『ヤスパース選集二八 現代の精神的状況』理想社、一九七一年 (原書一九三一年)、二五—二六頁。
- (10) Walther Rathenau, Ernst Schulin (Hg.), a. a. O., 1977, S. 22 『時代批判』からの引用は、改訂時に変更されたドイツ語由来単語が、初版単行本の従来の外来語の意味と大幅に違う限り、一九七七年の資料批判版からのものを引用する。以後、この資料批判版のページ数をカッコ内の数字として文中に記す。
- (11) 少なくとも現在入手している四七件の『時代批判』への書評のなかでは、ラーテナウのこの冒頭の部分の、近代化による精神的な豊かさの喪失という文化へのシニシス的な描写を直接に指定して批判する論評は、反ユダヤ主義に基づいた「ユダヤ人ラーテナウ」への個人攻撃的な批判と、ラーテナウの友人である評論家アルフレート・ケアの論評をのぞいて、見受けられない。
- (12) Löbl, a. a. O., S. 1.
- (13) Heimböckel, a. a. O., S. 184.
- (14) Heimböckel, a. a. O., S. 186-187.
- (15) G. Lomer, "Bücherbesprechungen. Zur Kritik der Zeit", in: *Politisch-anthropologische REVUE*, Elfter Jahrgang 1912/13, S. 55.
- (16) ラーテナウに関するこれまでの先行研究に、私自身多くを学んできたことは言うまでもない。特に、日本語文献では唯一ラーテナウの総括的研究書として、技術合理性の担い手であるテクノクラートとしての

ラーテナウの社会的機能に焦点を当て、彼ら技術者たちの社会改革論に内在する矛盾点を析出し、同時にドイツ・ユダヤ人であるラーテナウの葛藤を含んだ社会とのかかわりも描出した、小野清美『テクノクラートの世界とナチズム』ミネルヴァ書房、一九九六年、が挙げられる。また同化ユダヤ人としてのラーテナウとマキシミアン・ハルデンの社会化の葛藤を、二人の知的交流から、社会的に論じた、Hans Dieter Helige, "Rathenau und Harden in der Gesellschaft des Deutschen Kaiserreichs. Eine sozialgeschichtliche-biographische Studie zur Entstehung neokonservativer Positionen bei Unternehmen und Intellektuellen", in: *Walther Rathenau-Gesamtausgabe*, Bd. VI, München/Heidelberg 1983, S. 17-299. から、ラーテナウを社会史文化的な背景の中で捉えるうえでの多くの知見を得た。

- (17) Hans-Ulrich Wehler, *Das Deutsche Kaiserreich 1871-1918*, Göttingen 1973, S. 111, S. 162, S. 202. Thomas Nipperdey, *Deutsche Geschichte 1866-1918. Machtstaat vor der Demokratie*, Bd. II, München 1998, S. 790.
- (18) ニッパードアイは、ヴィルヘルム期の学術に関する章の中で、ラーテナウをニーチェから生の哲学と危機の哲学の影響を受けた者たちの一人として紹介し、芸術に関する章のなかでは、彼の作品内容に触れることなく、ラーテナウは哲学的・精神的・時代診断的エッセイの名手となった¹⁵と記してゐる。 Thomas Nipperdey, *Deutsche Geschichte 1866-1918. Arbeitswelt und Bürgergeist*, Bd. I, München 1998, S. 690, S. 790.
- (19) Heimböckel, a. a. O., 1996.
- (20) Walter Delabar, Dieter Heimböckel (Hg.), *Walther Rathenau. Der Prototyp der Moderne*, Bielefeld 2009, S. 9.
- (21) Lothar Gall, *Walther Rathenau. Portrait einer Epoche*, München 2009, S. 10.

- (22) 例えば、『時代批判』を契機として、フェルキツシュ運動の指導者で反ユダヤ主義者でもあったヴィルヘルム・シュヴァーナーとラーテナウはラーテナウの死に至るまで親密な交際を続け、シュヴァーナー研究の側からは、この交流によるシュヴァーナーの反ユダヤ主義的思考の揺らぎと民族主義運動の中でのシュヴァーナーの立場の微妙な変化が指摘されると同時に、ラーテナウはなぜシュヴァーナーと深い交流を結んだのか、という問いかけがなされているが、これに対する回答はラーテナウ研究の側からはまだ出されておらず、今後、微細な分節化を試みたい案件である。Wilhelm Schwane/Walther Rathenau, Gregor Hufenreuter/Christoph Knüppel (Hg.), *Eine Freundschaft im Widerspruch*, Berlin 2008, S.20-21.
- (23) シュロモー・サント(高橋武智 監訳)『ユダヤ人の起源 歴史はどのように創作されたのか』浩気社、二〇一〇年、九六頁。
- (24) サント, 前掲書 一〇一頁。
- (25) 上山安敏『神話と科学』岩波現代文庫、二〇〇一年、一七四―一七六頁。
- (26) Peter de Mendelssohn, *S. Fischer und sein Verlag*, Frankfurt am Main 1970, S. 565.
- (27) Ernst Schuln, "Zu Rathenaus Hauptwerken", in: *Walther Rathenaus Gesamtausgabe Hauptwerke und Gespräche*, Bd. II, München/Heidelberg 1977, S. 507-508.
- (28) 結局、ラーテナウは、第一次世界大戦の期間を除いて、この「政治社会的エッセイ」の分野で、S・フィッシャー出版社の一枚看板として、著作を継続的に出し続け、この分野で最も成功した作家として、一九一八年にS・フィッシャー出版社から五巻本の全集を出した。
- (29) Schuln, a. a. O., S. 508.
- (30) de Mendelssohn, a. a. O., S. 565. 実際、ラーテナウは、一九一〇年にモロッコへフランスとの鉱山権をめぐる交渉のため代理大使として派遣されたり、一九一二年の帝国議会選挙に、国民自由党から立候補しようとして働きかけたりと、政治的活動に関与するようになっていた。Heimböckel, a. a. O., 1996, S. 175.
- (31) de Mendelssohn, a. a. O., S. 591-592.
- (32) 上山安敏, 前掲書 一一五―一一六頁。
- (33) たよんは' Oppenheimer, a. a. O., Richard Ehrenberg, "Mechanisierung? - Durchgeisterung? - Kraftigung! Walther Rathenau, Zur Kritik der Zeit", in: *Archiv für exakte Wirtschaftsforschung*, Bd. IV, Heft IV, 1912, S. 468-477.
- (34) Graten Gobineau, Lutwig Schemann (übersetzt), *Versuch über die Ungleichheit der Menscherracen*, Stuttgart 1900.
- (35) Houston Stewart Chamberlain, *Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts*, 2 Bde., München 1899.
- (36) Walther Rathenau, "Von Schwachheit, Furcht und Zweck", in: *Die Zukunft*, Bd. 49, 1904, S. 223-239.
- (37) Schuln, a. a. O., S. 528.
- (38) ラーテナウの人種論にもっとも強い調子で反対の意を表明したのは、オッペンハイマーであるが、その彼でさえ、同じ書評のなかで、「北方ゲルマン人が(例えば黒人との比較において)高貴な人種であるという点において、私は彼ときわめて一致しているのだが、私がほとんど納得できないのは、北方ゲルマン人が、例えば「……」南ドイツ人や、「……」南フランス人や、少なくとも白人の「人種」に至る、その他の枝分かれした者たちよりも高貴である」という点である」と述べ

ており、やはり彼も同時代の人種主義から自由ではないことが伺え
る。Oppenheimer, a. a. O.

- (38) Oskar Klein, "Die "Entgermanisierung" Europas. Zur Kritik der Zeit", in:
Weimarische Landes-Zeitung Deutschland, 21. Juli 1912.

- (39) Stefan Zweig, "Feuilleton. Walther Rathenau's "Kritik der Zeit"", in: *Neue
Freie Presse*, 12. Juni 1912.

- (40) しかしながら、ラーテナウの書評者の中には、ゲルマン主義・人種主
義の擁護者である者たちもおり、彼らは、ラーテナウの「脱ゲルマン
化」ゲルマン的理想に関する叙述を引用しながら、書評者自らの人
種論を展開している。G. Lomer, a. a. O.; K. F. Wolff, "Mechanisierung und
Germanentum", in: *Deutsche Welt*, 6. und 13. Oktober 1912.

- (41) Stein, a. a. O., S. 239.

- (42) Stein, ebd.

- (43) Oppenheimer, a. a. O.

- (44) Alfred Kerr, "Walther Rathenau", in: *Pan*, 19. Sept. 1912, S. 1195.

- (45) ドイツの大衆文化のなかで、ゲルマン的イデオロギーを主唱する人々
の研究については、すでに古典的研究書ともいえるが、フリッツ・
スターン、ジョージ・L・モッセ、ヨースト・ヘルマントらの諸研
究が挙げられる。Fritz Stern, *The Politics of Cultural Despair: a Study in
the Rise of the Germanic Ideology*; California 1961. (フリッツ・スターン
(中道寿一訳) 『文化的絶望の政治 ゲルマン的イデオロギーの台頭
に関する研究』三嶺書房、一九八八年) George L. Mosse, *The Crisis of
German Ideology*; London 1964. (ジョージ・L・モッセ(植村和秀・
大川清丈・城達也・野村耕一訳) 『フェルキッシュ革命 ドイツ民
族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房、一九九八年) Jost Hermand, *Der*

alte Traum vom neuen Reich. Völkische Utopien und Nationalsozialismus,
Frankfurt am Main 1988. (ヨースト・ヘルマント(識名章喜訳) 『理想
郷としての第三帝国 ドイツ・ユートピア思想と大衆文化』柏書房、
二〇〇二年)

(きたおか ゆきよ・京都大学研修員)

